

## 心臓血管病のリスクは認知症と関係する

この研究では、ホワイトホール II 研究 (英国の縦断コホート研究) の被験者 7830 人 (平均年齢は 55.6 歳) を対象とし、壮年期の 10 年間での認知機能低下について、2 つのフラミンガム・リスク・スコアと認知症のリスク・スコアを比較した。

心臓血管病および脳卒中フラミンガム・リスク・スコアと、中年期の危険因子から老年期の認知症を評価するための心臓血管病危険因子・年齢・認知症リスク・スコア (CAIDE) と比較した。認知機能検査は推理力、記憶力、ことばの流暢さ、語彙力と総合的認知機能を含み、10 年間で 3 回評価された。その結果、心血管疾患リスクや脳卒中リスクは、記憶力以外の全ての認知機能検査のスコア低下に関連していた。推理力、語彙力、総合的認知機能のスコアが低下するほど認知症リスクが高かった。認知症リスク・スコアと比較して、心臓血管病および脳卒中リスク・スコアの方が 10 年間の認知機能低下に、より強い関連を示した。

CAIDE 認知症スコアとフラミンガム・リスク・スコアはともに壮年期の認知機能低下を予測するが、認知症の予防対策や変動する危険因子を把握するにはフラミンガムリスク・スコアの方がより有用である可能性が示唆された。

(出典 : Neurology. 2013 ; 80: 1300-1306.)